

パネルディスカッション

パネルディスカッション「司会の言葉」 21世紀における人材育成はどうあるべきか：熱帯医学の再興に向けて

竹内 勤

慶應義塾大学医学部

今年度の日本熱帯医学会大会では、学会の今後の発展の礎とするべく標記のタイトルでパネルディスカッションを開催する。パネリストは下記の方々である。池上清子（国連人口基金東京事務所） 富田明子（国際協力機構） 中村安秀（大阪大学人間科学部） 野崎慎仁郎（国際厚生事業団） 平山謙二（長崎大学熱帯医学研究所）開発途上国のみならず、世界のおかれた状況を見るに、現時点で複合科学としての熱帯医学の重要性は、わが国においてはかつてないほど高まっている。すなわち、一つにはわが国の安全・安心のために欠くべからざる存在として見られている。また合わせて、わが国の国際医療協力の立場からも、その発展は強く望まれている。しかるに、熱帯医学会の状況を見れば、会員数は近縁の寄生虫学会などと同じく増加傾向を示しておらず、会員のいわば高齢化を如実に見る事ができる。「熱帯医学の再興」をテーマとして取り上げた所以である。以上のような状況のもと、我々は今後何を目指して進めば「熱帯医学の再興」を達成できるのであろうか？明確なのは、まず第一に今後を担う若い優秀な人材を育成できなければ、我々の将来は危ういと言う事であろう。その意味で、山口大会長の御英断により、本パネルディスカッションを持つ事が出来たのは、誠にタイムリーなものと言えよう。パネリストのうち、池上、富田、中村、野崎の四氏は、国際保健、あるいは国際医療協力の分野からお願いした。熱帯医学会にはどちらかと言えば最も近縁で合同大会を開催した事もある国際保健医療学会より、いわゆる科学技術にシフトした研究を行っている人が多い。これはこれで更に大幅な発展を目指すべきであるが、一方それらの科学技術を「問題解決」に適用するための「人材」を含む社会的な技術などは熱帯医学会よりむしろ国際保健医療学会にリソースがある。従って、今回のパネルディスカッションでは「人材育成はどうあるべきか」をテーマとして、まずオーガナイザ?として筆者が冒頭、背景に関して概説を試み、次いで本テーマに関して、熱帯医学会を外から見た場合の批判、提言を国際保健、国際医療協力分野の四名の方々をお願いし、最後に熱帯医学会側からは、大学院レベルの支援をうたっている文部科学省のCOEを運営している長崎大熱研の平山教授に見解を述べて頂くというスタイルで行いたい。このパネルディスカッションでは、他の企画以上にフロアからの積極的な発言が成否の鍵となる。その意味で相互討論の時間を多く取り、成果に基づいて、ある程度明確な方向が打ち出せればと期待している。

TSUTOMU TAKEUCHI
School of Medicine, Keio Univ, Tokyo, Japan